

袖觸れし人

土田龍太郎

源氏物語五十四帖、大和唐土古へ今にたぐひなくめでたき物語なりと鈴屋大人の嘉みせられしはげにさることにて、これになずらふべき假名物語さらにあるまじけれど、これただあはれにおもしろき作り物語とばかり見てやみなましかばいまだこと足らはず、なかなかあいなからまし。

源氏物語の收むる大和歌いとあまたにておほよそ七百九十首にあまれど、その中に及びなく卓すげれしもの少からねば、五十四帖さながら大いなる歌書に見ゆまじきにもあらず。

されば藤原俊成、六百番歌合の判詞はんじにて、紫式部歌讀みのほどよりも物書く筆は殊勝なりと述べながら、源氏見ぬ歌讀みは遺恨のことなりと云へり。また世下りて、玖山公九條たねみち植通、里村紹巴にめでたき歌書はなにかはべるなど三たび問はれしとき、三たびごとくだ源氏物語とばかり答へしこと、松永貞徳の遺せる戴恩記にて知るをうべし。

歌讀みのほどよりも物書く筆は殊勝なりと云ひて紫式部を論あげつらへる俊成の詞、式部のさまで巧みなる歌人にもあざざりしごとくに聞ゆまじきにもあらねば、俊成の式部の歌才をまことはいかに品定めたりしやいぶかしき方なきにあらず。式部にそなはれる歌才のみじかりしは疑ひなけれども、俊成の親しみ來たれる世々に名立てりし歌人とは風躰ふうたい同じからざりけむかし。げに式部の歌柄、古への人麿赤人とは距り、中昔の業平貫之、後の世の西行定家とも異れば、源氏物語の大和歌を定まれる風躰の粹にあながちに收めむとせばむげに危ふかるべし。

式部の歌才の世にたぐひなきはさることなれども、五十四帖に載れる歌みながらめでたしと思ひなさむはかへりてえうなきなり。そもいか卓れたる歌人なりともその遺せる詠草にかつて歌屑なしとは定むべからず。おほかた作り物語に見ゆるもの、男も女もその品さまざまにておのがじしその品にかなへる歌詠むほかにすべなきなり。さればひとしなみに良き歌のみ詠み出でたらむはなかなかまことしからず、作者もかへりて心おとりせられなまし。源氏物語の中にて歌詠む男と女いとあまたにて、貴きあり賤しきあり、才の高きあり低きあり、おのおのの品と才にしたがひて詠める歌巧みにもなり拙つたなくもなり、心の深き浅きによりて勝り劣りのけぢめの顯あはるるはげに避りさがたきことわりと云はでやはあらむ。人となりの同じからぬにまかせて品異なる歌を詠ましむる式部の心しらひと巧み、なみなみの作者のえまねぶきはにはあらず。

そはさてもこそあれ、五十四帖を讀み進むるに、敷島の道まことここに究まりけりとうちおどろかるるまでにめでたき一首にゆくりなく目とまることあり。おぼろけの歌讀みのたえて至りがたきかかるとさかひに入りぬる紫式部の生れつきたる歌心の深きことそこひも知られねば、なほざりの言の葉もてあながちに譽め讃へむともなにかはせむ。ただおそろしとばかりに云ひてやみなむほかすべなかるべし。

いともめでたき歌、源氏物語のところどころにあれども、ゆめなほざりに見るまじきは、手習の巻にて浮舟の詠める

袖ふれし人こそ見えね花の香に

それかと匂ふ春のあけぼの

といへる一首にてぞある。

宇治八宮の乙娘なるこの浮舟、心の闇に惑ひぬるはてに宇治のわたりのわが宿をあくがれ出でぬるそのつひの身を小野の尼君の庵に寄せたれども、かしこにて誦經手習に日を送りぬるままに年返りてほどなきある朝、後夜の闕伽たてまつらむとて下臈の尼に折らせける紅梅の花のさと散りて香のみばかりただよひしときふと口遊めるが右の一首にほかなきなり。

ゆくりなく匂ひ來れる梅の香のよにめでたきあまりに、かつてわが戀ひしたひし人の袖の香なるかと利那ばかりはおどろかれぬれど、その人そこにおもかげだに見ゆべくもあらねば、やがて現し心にかへりて、あとにただやるかたもなき思ひのみ残れるぞあやなき。

大和歌の風躰くさぐさあれど、世々の歌人のことに尊び來れるは幽玄躰にほかなかるべし。その論ひさまざまなればここに述べつくすべくもあらず。鴨長明無名抄の内にて幽玄のことを説きていと詳かなれどそこに引ける、詮はただ詞に現れぬ餘情、姿に現れぬ景氣なるべし云へるある人の説、幽玄のおもむきをあらあら捉へたりと云ひつべし。

右の浮舟の歌、えならぬ餘情のこもれることただならず、幽玄のかたにとりてかくも卓れたる一首、五十四帖の内ほかにさらに見出でがたし。ことにそれかと匂ふといへる四の句、夢とも現ともなき利那の心地のはかなさを梅の香によそへて一言に述べおほせぬるわざえもいはずめでたし。

同じ浮舟の歌、文字いささかたがひたれど

袖ふれし人こそなけれ花の香の

おもかげかをる春のあけぼの

とて正徹物語に見えたり。徹書記これを幽玄の歌の秀れたる例と見なせりしがごとし。

(令和五年一月二十三日受附)